

# 第4回「連続して学び合おう！」模擬授業の実際の巻

## 「こういう積み重ねが、自分のため、何より子どものために・・・」



「おてがみ」の模擬授業をする金野 T

の「読み取り模擬授業」を青年部の先生が行い、学び合いました。様々な学校から、ベテラン、中堅、若手十四名が集いました。越前教文部長（江差小）は、開会の挨拶の中で、自分の青年時代を振り返りながら、若い先生の割合が極端に少なくなっていることを挙げ、若い先生方が考えていること、感じていること、悩んでいることを声に出して発信

青年部と教文部共催の第四回「連続して学び合おう！」が、南部（上ノ国小）で行われました。今回は、ベテランの先生から今まで学んだことを生かして、国語

すること自体が困難な時代ではないかと指摘。つながらながら学ぶこと、視野を広げ力量を高めること、そして、自分磨きを重ね自分の「根っこ」をしっかりと持つことの大切さに言及、この学習会の意義を語りました。

一時間目は、小学一年生の教材「お手がみ」。金野知未さん（上ノ国小）が行いました。最初は緊張していましたが、持ち前のセンスの良さで、教室を和ませ、自由で安心して雰囲気醸成し、授業を進めていきました。途中、子どもたちになりきった参加者の先生達に戸惑いながらも、自らの授業の課題を見つけ、これから実際に行われる授業の見直しができたようでした。

二時間目は、小学二年生の教材「アレクサンダとぜんまいねずみ」。藤谷純子さん（上ノ国小）が行いました。今まで積み重ねてきた教材研究の深さ、読み取る視点の確かさ、そして、何よりもこの授業を受けた子どもたちが、この物語を好きになるだろうなあと感じられる授業でした。「私、二年生担任が多いんですよ」と謙遜されていましたが、経験だけではない「確かな根っこ」のようなものをうかがわせることができました。

三時間目は、授業後の話し合い。「低学年の音読の大切さ」そのための「教師の引き出し」「何を読み取らせるか」

### 誰が退職手当を下げたのか

賃金・定員・教育予算交渉教育長交渉に参加して 書記長 中山晴生

今回の交渉に参加してみて、ふつふつと湧いてきた疑問があります。それは、「誰が退職手当を下げたか？」という問いです。教育長は、「退職手当を国に準じた額を削減する」と「国に準じた額」を水戸黄門の印籠のように振りかざし、「お上がさげてるんだもん、しようがないべ」と言いたげに回答しています。

「こと」の発端は、解散前のどさくさに紛れ、昨年十一月十六日で衆参合わせてわずか一時間四十五分で強行採決したこと。これが、順次、地方へおりてきた形は言うまでもありません。

もちろん、民自公の談合は許せませんが、「強行採決しても世論は『おかしい』と言わないだろう。むしろ『よくやった』と言ってくれ、選挙に有利に働くよ」と踏んでいるからに他なりません。

その背景には、依然として続く不景気はもちろんですが、新自由主義の「働き方」にあるという点にもしっかりと目を向ける必要があります。二〇一二年の統計（労働力調査）を見ると、非正規雇用が1786万人で35.1%にのぼります。約3人に1人は、非正規雇用が現状です。また、十五才から二十四才では男性

45.5%、女性で52.6%と、約2人に1人は非正規雇用という現状です。低賃金で待遇が悪く、正規雇用といつしよに働きたい、しかも、いつでも首を切られるという不安定な状態に晒され、先の見えない状態におかれています。『言いようのない怒り』や『鬱積する不満』は、いかばかりでしょう。この「非正規雇用」に代表されるような怒りや不満を持つ人は、多数派になってきています。政権も無視できません。本質を捉えようと、本来、この矛先は、自己責任と競争主義を掲げ、政治を行った政府や、この間膨大な内部留保を蓄えた財界に向かいます。その政財界に向かわぬようにする戦略としては、別の攻撃対象を用意するといった、「身近にいて、ちよつと得しているような誰か」に目を向かわせるのが得策です。具体的には「最低賃金労働者」は、生活保護受給者（「民間人は公務員への「攻撃」という構図を作り、公務員・生活保護受給者へのパッシングです。教職員は「不適切勤務」実態調査の報道や芸能人の家族を取り上げた、生活保護受給者の不正受給報道は記憶に新しいところ。もちろん、「不適切勤務」や「不正受給」は、あつてはならないことです。が、しかし、

その人達はごく僅かな例です。「129億円が不正受給」とマスコミに大きく取り上げられましたが、不正受給者は、割合に直すと実は0.4%なのです。99.6%が不正ではありません。そして、その中で、高齢者・障がい者・傷病者のため働けない世帯が約75.0%で4分の3と推定されています。給付がカットになれば、すぐ命に直結する人たちなのです。

教職員の研修問題や不適切勤務の報道も然りです。ごく特殊な例をあげ、いかにも先生達のほとんどがそのようなやつて「不適切だ」というようなセンセーショナルな報道でした。この不公平な報道には、教職員達は憤りを隠せません。そして、またパッシングに晒されてきました。

本論に戻ります。「誰が退職金を下げているのか」。もちろん直接決定ができる権力者であることは、間違いありません。がしかし、その決定の背中を大きく押ししているのは、「ちよつと得しているようにみえる誰か」をパッシングする「民意」であり、その「民意」の背景にあるのは、「言いようのない怒りや鬱積する不満」という「感情」ではないかと考えるようになりました。

その怒りや不満の本当の解決策は、「なぜ、生活が豊かにならないのか」という「本質を問う」ことです。生活保護受給者をパッシングし

ても、公務員をパッシングしても何の解決にもなりません。その「本質を問う」ことで、誰の所に、どのようにして富が集まっているのかがわかるはず。望んだ形では決してありませんが、今回の福島第一原発の苛酷事故で、政・産・官・学の癒着による特定者だけが富や権力を独占できる仕組み「原子力ムラ」が明らかにされました。今回の原発問題においては、ここに問題の本質があることに気づき、マスコミも取り上げざるを得ず「世論」が形成され、日本のあり方を問う「民意」が国を動かし始めています。

これからの私たちは、まず、「最低賃金」を「民間vs公務」という無駄な闘いにいち早く終止符を打つ手立てをとり、地域の「声」や保護者の「声」、若者の「声」を聞き取り、共同をつくることに意を尽くすことが大切だと思います。これからも、直面する取り組みとして、教職員の「声」を道教委に直接届け、実質的で具体的な交渉はもちろん必要です。しかし、それだけでは本当の解決にはならないような気がします。様々な市民と様々な形で「声」を「共有」し、共同していくことを地道にやっていくことが、もう一つの長い「闘い」として重要で、かつ、実は近道のように思えてきました。

た。昼食後は各支部の交流となり、支援学級の数が不足、担任の入れ替わりが激しい問題、また免許保有率を市議会の調査が入るなど様々な問題が交流されました。議案は原案通りに可決、来年度の役員人事も承認され、最後に今年度末で定年退職される森田先生が思考停止に陥りやすい情勢の中「教員の専門性とは、子どもとのことで悩むことだ」と離任の挨拶をされ、いたく胸に染み入った言葉でした。

### 道教組障教部総会に出席して

檜山教組書記次長 安里 朗

道教組障教部総会が二月三日（日）、札幌労働センターで開かれ、各単組から十一名の代表が集まりました。冒頭、檜山道組書記長から賃金確定交渉等、国内・道内情勢の経過報告があつたあと、議案審議が始まりました。社会福祉・障害者政策の情勢や、条約批准にむけてインクルーシブ教育について審議の内容の他、北海道の障害児教育の情勢について語られ、養護学校



総会に出席した各単組の障教部

の過密化、先生方の学びの問題に触れました。また障教部アンケートの結果についても報告がありました。障害児教員「障害部」という名称についても今後話し合うことになりま